

interview

木場に受け継がれる川並の心意気

「木場の『角乗り保存会』が往事の川並の角乗りを披露した」という記事が毎年夏に見られます。保存会が江東区の木場公園で角乗りの技を披露したり、技を伝承するため角乗り指導を行っているのです。東京の下町・木場は既に「新木場」に移転し、流通形態の

変化により、木場の文化を背負っていた「川並」という職業もなくなってしまう。元川並鳶者として「角乗り保存会」の会長として、若い世代の方々に角乗りの技を伝え続けている川藤健司さんに、木場に息づいていた「水都の文化」についてうかがいました。



川藤 健司氏

川並鳶特有の細い股引きと、七枚小鉤（こはぜ）足袋をはき、腹がけ半纏姿のいなせな川藤会長。昭和十八年、東京木場で生まれる。幼少の頃より父の家業である川並の修行を始め、昭和三十六年から、本格的に川並の世界に。現在、(株)川勝代表取締役会長。「東京木場角乗り保存会」会長。



東京江東区内の木場公園のイベント池で、日頃の成果を披露する「角乗り保存会」の皆さん。多くの若者が、江戸の伝統を継承しようと集まってくる。

木場は木材を中心に

つくられた町

川藤さんは、現在「角乗り保存会」の会長をしておられるわけですが、「自身も川並でいらしたとうかがいました。どのような経緯でこの道に入られたのでしょうか。」

川藤 私の親父が川並(注1)で、この木場で生まれ育った人間でして、親父が初代、私が二代目ということ。親父は明治生まれのいわゆる頑固親父、竹を割ったような性格の人でした。まあ、物心ついて十歳くらいから夏休みや春休みといった学校が休みの度に、遊びがてらに親父の手伝いをやらされました。その経験が川並の第一歩でした。本格的に親父の跡を継いだのが、一九六一(昭和三十六)年。この年から川並の世界に入るわけですが、角乗りとつきあひもこの時からです。

角乗りについてうかがう前に、川並がどんな仕事をしていたのかについて教えてください。

川藤 川並を語るには、木場という場所がどんな所だったのかを抜きにしては語れません。小唄の文句にあります、木場は橋と堀の町、「木の香ゆかしき深川の」と続くんですね。橋がたくさんあるということ、川がたくさんあるから、橋を渡って木場、深川に入ると、木の香りがブーンとする。そのものずばり、もく(木)の場所「木場」なんです。



かつては丸太の運搬、貯木に使われていた堀が、親水公園に生まれ変わっている。

その木場は、材木屋、川並(注2) 筏師(注3)、木挽き(注4)、荷揚げ人足(注5)の町でもありました。例えば、荷揚げ人足、伝馬船で材木(製品になったもの)を運んでくると、堀に面した岸壁に横付けにする。各材木屋の堀に面した所には、荷揚げ用の取り入れ口が切つてあります。伝馬船からそこへ「あいび板」と呼ぶ足場板を渡すんですが、幅一尺、長さ三尺三寸の板をまともに渡すと坂になっちゃうでしょ(注6)。人力で運び上げるわけだから、あんまり坂になっちゃうときついんですよ。それで、岸壁の取り入れ口を荷揚げ用に、伝馬船よりも少し低くした場所を作っておくんです。そうすれば勾配ができて材木が取り入れやすくなる。このように、木場の町はすべて木材の商いを中心にして、考え抜いて作られていたんです。

川並の仕事は

木材のディスプレイ師

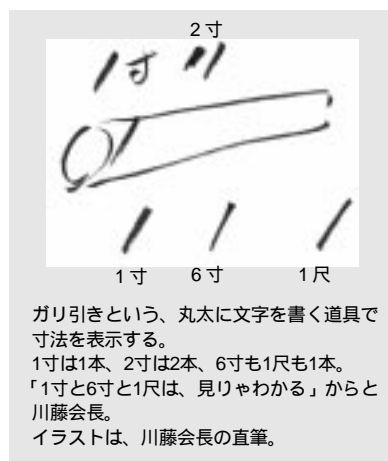
川並の仕事と筏師の仕事との違いをお話ししましょう。本船や帆船で運ばれてきた原木が東京湾に着くと、荷主が自分の買った原木を筏に組んで貯木場に持ってくるんですが、その仕事をするのが筏師。筏師は貯木場で大まかな仕分けをして、原木を再び筏に組み直します。東京湾に着く原木は、商社や木場の大問屋が山で買入れたもの。原木はその後、一次問屋、二次問屋を渡つて、製材所で製品になりますが、川並は製品になるまでの道筋で発生する、細々した仕事を受け持ちます。

具体的には、どのような作業なのでしょう。

川藤 簡単に言えば、ディスプレイの仕事かな。きれいに陳列して見栄えを良くしたり、検尺といつて石数(注7)を確認したり、等級(質)を整えたり。要するに、手間をかけることで付加価値を付けて高く売れるようにしたんです。靴屋で言えば、筏師はできた靴をまとめて何足も売る卸売り業。川並は一足づつ売る小売業にあたります。ただ小売りと言っても、二次問屋から三次問屋へというようにどんどん細かい商いになっていくんです。

例えば私が、Aという二次問屋の出入りの川並だったとします。原木問屋から仕入れた丸太は、石数で買い上げて堀まで運んできます。それを一本一本測り直して、浮

かんでいる丸太にガリ引き(注8)で正しい寸法を印つけてやる。おもしろいことに一〜三寸は一本引つ掻くんですが、四寸は四か4と書き、五寸は×(ハツ)、六寸は一寸と同じで一本なんですね。見りやわかるというか、一寸と六寸を間違えるわけがないですよ。一尺も一本です。



ガリ引きという、丸太に文字を書く道具で寸法を表示する。1寸は1本、2寸は2本、6寸も1尺も1本。「1寸と6寸と1尺は、見りやわかる」からと川藤会長。イラストは、川藤会長の直筆。

同じようなことですが、よく親父から「サシは杖にしとけよ」と言われたものです。検尺は差し金を使って測るんですが、目で測れということ。目で間違いない測れるようになれば、差し金を当てるのはただ確認だけになるんですね。それを差し金に頼るから数字を読み違えることになる。要は、それを戒める言葉です。

検尺するのは確認の意味もありますが、まとめ買いをした丸太は、細かく測ると合計した石数上がるんですね。そうすると例えば百万円で仕入れたものが百十万円になって、我々の手間賃が出る。出入りの川並としてAの旦那の役に立つというわけです。さて検尺が終わると、次の買い手に渡



富岡八幡宮の境内にある「木場の角乗り」碑

すのにきれいに並べ変えてやる。太いのは細いのがばらばらに並んでいる筏っていうのは見栄えが悪いってんで、両端に細い丸太を、中央に太い丸太を並べて蒲鉾型にするんです。そうしてできた筏を、今度はBという三次間屋の川並が検品するんです。丸太の直径が百分(一尺)で長さ十尺が一石。丸太の状態で見当をつけるんですが、それが九十七分しかなかったとする。分切れ(ぶぎれ)と言っんですが、そういうのを見つけると、「おい、これは切れるじやねえか」と指摘されるんです。Aの川並としては、危ないのを覚悟の上で目一杯測るわけですよ。ある程度利益は出ているのですから、そこで赤伝が切られてもAの旦那の損にはならない。かえって「うちの川並は、俺のために頑張ってくれた」ということになる。顔が立つということですよ。逆

にBの川並が分切れに気付けば「さすがうちの川並だ」ということでBの旦那に顔が立つ。だから、どの川並も目一杯で木を測る。当然、川並同士で、分切れで言い争いになることもありますよ。

わたしは健司ですから「ケンぼつ」と呼ばれてたんですけど、「おいケンぼつ。切れる(分切れている)じゃないか」と言われる。「おじさん、どこが切れるんだよ」というと、「おまえ強情はるんじやないよ。切れてんじやねえか。こつちは、差し金を引っかけるところにゴミで厚みをのせて木をひっかけてるから、切れてないじゃないか」と。すると、「おいケンちゃんよ。俺は何十年もやってるんだよ。この仕事をよー。俺も強情だから「おじさん何言っただよ。年のこと言っなら、おじさん、俺はお袋の股から差し金もってオギヤーと生まれてきたんだよ」って言うとおじさんが、「いや。参った。お前には参った」となるわけですよ(笑)。そして「おじさん、借りとくよ。次の時返すよ」となるわけ。そして、今度相手がそのおじさんの時は、逆にうんと甘く測ってやるわけですよ。「今日のところは、貸しといてやるぜ」と言い、受けるほうも「この借りは、次に返すよ」っていうんで、持ちつ持たれつだったんです。

川並は水都江戸にしか いなかっ

江戸に限らず、木場のように木材を商っていた地方都市にも、川並という職業はあったのでしょうか。

川藤 これが江戸だけなんですね。不思議なことに、木場というのは、もく(木)の場所「木場」だから、江戸に限らないわけですよ。江戸深川の木場は、徳川幕府による築城を中心とした町作りから、木材市場が活況を呈したのが始まり。だから木場も川並も、寛永年間から約四百年の歴史があります。木場の中心となっていた深川は、深川(一六四一)年の大火の後、材木置き場は火災をおこす恐れがあるからと、御用材木商人を移転させた町外れの河口が今の深川です。ここに独自の情緒や人情が発達して、他の地域には見られない川並という仕事の需要を生んだのでしょつ。

川藤さんが本格的に川並となられた、昭和三十六年頃には、川並の親方のは何人



新木場に材木屋が移転して跡地には、「都立木場公園」として憩いの空間が提供されている。

ぐらいいらしたんでしょつか。

川藤 確かな数字ではありませんが、親方は二十人ぐらいいたと思います。その下にそれぞれ十人ぐらいの若い衆がついていましたから、全部で二百人はいたのでしょつ。まあ、丸太を川に並べて点呼取ったから川並なんだよ。

角乗りー 川並の「遊び」が 「トレーニングの場 粹の見せ場」に

川並と角乗りとはどついう経緯でつながってくるんでしょつか。

川藤 慶長年間から、約四百年になるつかというのが角乗りの歴史ですよ。江戸という所は、江戸城の築城のために、全国からいろいろな職人が集まってきた場所ですよ。当時は遊びがあまりない時代ですよ。職人には娯楽というものがなかった。角乗りというのは、川並という職業の人間が、余技娯楽として編み出したのが始まりですよ。仕事の合間に、丸太を回してみる。ところが、丸太じゃ簡単でもむしろくない。こついう余技というのは難しいほつが楽しいんですよ。ツガ材は角材で来ましたが、今度は角材を回してみる。角材というのは、水面に対して斜めになつて浮くんですよ。それを回すには、角材の角の所に足の土踏まずを引っかけていく。足の裏を載せるのだから、

面が四つしかないんです。それに比べると丸太は、足を引っかけられる所も載せる所も無数にある。それで、難しい角乗りを夢中になって練習して、回せるようになるのと下駄を履いてみたり、身近にある扇子や番傘を持ってみたりと、次々に難しい技に挑戦していったんです。角乗りというのは、川並の余技、娯楽であると同時に、身のこなしを洗練させて、身軽に仕事ができるようにするトレーニングでもあったのです。それでそれらのすべての技を結集したのが、三宝乗りです。

ここに川藤さんが、三宝乗りを披露されている写真がありますが。



角乗りの技の最高峰、「三宝乗り」を披露する若き日の川藤会長。後ろでしゃがんでいるのは川藤会長の師匠中村喜三郎さん。

川藤 ああ、これは明治百年の記念の時の写真だから、一九六八（昭和四十三）年かな。角材の上に三宝を三段重ねにして、高い下駄を履き、扇子を持って演じる。しかも、登場するときには、三宝の上にあぐらをかいて突き出してもらって出てくるんです。あぐらからスッと立つと、野原に一本

の杉が立っているように見えるんですね。そこでやはり深川らしく、粋な口上が入る。「野中の一本杉でござい」と言うと、パツと立つわけです。それから義経の八艘飛び、鶴の餌拾いと続いて、三宝をばらして角材の上に飛び降りて回すんですが、そこでも「これより器はらしてございます。通称獅子の子落とし、親獅子が子獅子を谷底に突き落とすように見えましたら「ご喝采」と口上が入ります。今も、三宝乗りができるように、会員には、全部教えています。

『木場角乗り保存会』

現在、東京木場角乗り保存会には、何人ぐらい所属していらっしゃるんですか。

川藤 会員は二十五名です。木場の角乗りは、一九五二（昭和二十七年）年に東京都指定無形民俗文化財に指定されました。新木場への移転ということもあって、ここが木場だったというものが何も残っていない。そんな状況に義憤を感じて、保存会に入る深川生まれの若者も多いんです。木場の情緒がなくなってきたということは、川がなくなり、堀もなくなり、橋もなくなつて、筏も浮いていない状況になり、ここが木場だったということを表すものが一つもない。角乗りは、そういう意味から江戸文化、江戸の水の文化の継承でもあります。

川藤さんが川並になられた頃は、まだまだ盛んな時代だった。

川藤 ええ。この写真で私の後ろに座っている人は、副会長の中村喜三郎さんという人で、私にとつてお師匠さんですよ。私が角乗りの世界に入った時に、この中村さんから「お前は川並の伴だし、お前の親父に俺は世話になつている。お前は将来、角乗り保存会の会長にならなくちゃならない人間なんだから、しっかりやってくれ」と言われました。中村さんはその時分、この三宝乗りをやっていたんです。それで「お前もこれができるようになって、いずれ会長になつてくれよ」とずいぶん叩き込まれました。

最近の保存会の様子は、いかがですか。

川藤 乗るのは速く上達するけれど、色気がないね。先程の服装だって、そんな細い股引きを穿くのは粋を気取つてのことでしょう。やはり昔は遊ぶ所でも色街があつて、自然と身についたものなだけけれど、だんだんそういうわけにもいかないものね。本来、芸を磨いて、木の知識もあつて、色気もなくちゃ川並は一人前じゃなかったんだから。鳶口（注8））を使える人もいなくなつたしね。筏を重ねて置く場所を取らないから、組んだ筏の上に丸太を引き上げて二重、三重にするんだけど、丸太に鳶口を打たないで人が打つた鳶口の鉤の上に誤つて鳶口を打つちゃう。するとすかさず「バカヤロー、お灸据えるんじゃないよ」と怒鳴られたもんです。昔は、二言目にはバカヤロー。でもそれが愛情表現だったんだよ。木場、深川、川並といえは、やはり八幡様



水掛け祭りでお有名な富岡八幡宮。木場、深川の心意気は、ここから発信する。

のお祭り。富岡八幡のお祭りがなければ、話が始まらないんだよ。そして八幡様のお祭りは、水掛け祭り。ここでもやはり、木場は水とは切つても切れない縁があるんだ。



- (1) 川並 木場で原木を仕分け、検品する川並職人のこと。
- (2) 筏師 原木をまとめて筏に組み、運ぶ職業で挽くこと。
- (3) 木挽き 製材職人。今でも最高級の丸太は、手作業で挽くこと。
- (4) 荷揚げ人足 堀に面した材木倉庫に横付けされた舟から、人力で材木を運び上げる人足。
- (5) 一尺は約三十三センチ。一寸は一尺の十分の一。
- (6) 石数 体積の単位。材木の場合、一石は十立方尺を表し、約二八立方メートル。
- (7) ガリ引き 丸太を引っ掻いて、字を書く道具。彫刻刀のような形状をしている。
- (8) 鳶口 丸太を引き寄せるのに使われる、竹竿の先に鉤の付いた道具。

news storys of water

【消えゆく水都と伝統】に関する新聞記事

生き物の生態を重視するE(Ecological)の視点や地域の福利を重視するC(community)の視点を背景に、様々な水とのつきあい方が生まれる一方、徐々に失われていくものもあります。全国には「水都」と呼ばれる都市があります。そのイメージは様々で、用水や水路が都市の中を巡り盛んな水運の名残りととどめている都市、清廉な湧水が豊富な都市、川を中心に特徴ある水辺の景観を構成してい

る美しい都市…こうした「水都」が80年代～90年代を境に失われていき、水都に残っていた智慧や伝統が消えていこうとしています。

記事を見ると、そうした動きは「水運」や「銭湯」に象徴されているようです。現在、水運は見直されつつありますが、一方で「経済的採算がたたない水上バスが運行から撤退」という記事も目に付きます。

ご紹介するのは、データベース化した水に関する新聞記事より、朝日、読売、日経、日経産業の記事の一部分です。どの記事も要約されたものです。

【銭湯】

銭湯のある街、見直そう。減る一方の銭湯を元気づけ、ふれあいのある街づくりを考えようと、豊島区街づくり公社と区内の浴場組合が手を組んだ「としま銭湯博覧会」が、あす七日から開かれる。番台や洗い場など銭湯仕立てにした会場での展示講演に、ペンキ絵描きの公開などを通して、風呂上がり気軽にそぞろ歩ける町を作りたいという。博覧会は、池袋駅に近い区民センターが主会場（一九九六年三月六日 朝日）

明治から昭和にかけて建てられ、今は姿を消した銭湯の写真などを集めた展覧会が目黒区原町二丁目の永生湯で開かれている。永生湯も今月二十七日で閉店する。「庶民文化探究家」町田忍さんが、永生湯をはじめ、全国を歩いて撮りためた作品を展示している。（一九九七年八月二十三日 朝日）

【和船・船】

船大工の八代目で江東区の無形文化財（工芸技術）に登録されている佐野一郎さんが、区教委の依頼で三十八年ぶりに製作した和船が完成、作業場のそばの砂町運河で無事進水した。和船は、全長十メートル、幅一・八メートル。スギとヒノキを使い、川遊び用の船をモデルにしている。進水式では、佐野さんが船首にコマと塩を盛り、酒を船内にまいたあと、船を川面に下ろした。和船は区教委に寄贈される。（一九九六年三月二十三日 朝日）

江東の船頭さんの会が江戸時代の渡し再現、川との暮らし伝える橋渡し役に。江東区が所有する伝統的な

木造船を操る船頭さんのグループ「和船友の会」が、江戸時代にあった小名木川の渡しを再現しようと毎週水曜日に操船の練習に励んでいる。「水の街に育った子供たちにもつと川に親しんでほしい」と意気込むのは事務局長を務める河合未二さん。江東区は横十間川親水公園のシンボルとして、伝馬船と網船を公園内に係留している。昨年三月、この和船のごぎ手を区が募集したところ、四十年前前に漁師をしていた人など、腕に覚えのある五十代から七十代の男性二十二人が江東、墨田、足立区から集まった。この時のメンバーを中心に和船友の会ができた。（一九九六年四月六日 朝日）

江戸の昔から伝わる舟遊びを楽しむんで下さい、と江戸川区内にある十八軒の船宿で組織している「江戸川遊漁船組合」が、五月一日から屋形船の紹介月間として割引料金で奉仕する。川の浄化が進み、自然と親しめるマリネジャーとして人気の出てきた屋形船のよさを知ってもらおうと企画した。（一九九六年五月一日 朝日）

和船、最後の船 再生に腕振る。船大工の技術を何とか伝えたいと藤原さんは考えている。二十二年ぶりに戻ってきた「わが子」は、思いのほか元気だった。船大工の藤原一善さん（墨田区江東橋）は、目を細める。船遊びの一番楽しい季節に間に合うよう、立派な姿にしてやる。杉材のその和船は、江東区にある横十間川親水公園の一角に、十数近い身を横たえている。藤原さんが、江東橋の酒店主、藤倉隆三さんの注文で一九七四年に造った、江戸前の荷足船だ。（一九九六年六月十三日 読売）

東京湾の養殖海苔の採取に使われた和船を造る技術を紹介する特別展が、きょう二十九日から、大田区立郷土博物館で始まる。館内で実際に和船の「釣り舟」の復元作業が行われる。請け負った地元の人兄弟は、かつて船大工としてならした人たちがかりで、いい仕事をお見せしたいと張り切っている。（一九九六年九月二十九日 読売）

かつて日本一海苔生産地だった大田区大森地区に残っていた最後の海苔船が、廃船となって同区南馬込の区立郷土博物館に保存される事になり、七日、引上げ作業が行われた。（一九九八年八月八日 読売）

【水運の興亡】

多摩川水上バス、九七年度にも免許申請、川崎市、発着場建設へ協議。川崎市は多摩川で水上バスを運航する計画について、九七年度にも運輸省に運航免許を申請する方針を固めた。今年九月をめどに五川崎駅付近に発着場を建設する手続きに入り、併せて運航計画を策定する。早ければ九八年度にも運行を開始する見通し。船上から眺める都市景観や野鳥など、新しい観光資源として売り込み、市全体のイメージアップを狙う。（一九九六年三月八日 日経）

明治以降の近代化で、いったんは廃れた船による河川輸送の「舟運」を復活させようと、建設省が検討を進めている。都市の交通渋滞や排ガス問題の解消に加えて、災害時に強い輸送手段としても見直す意義があるとして、現代版「高瀬舟」構想が浮上。ヨーロッパなどでも同様の取り組みが行われているといい、建設省は今年策定する「第九次治水事業

五カ年計画」に盛り込む方針だ。河川舟運や「内陸水運」への取り組みは、ヨーロッパでも一九八十年代から本格化。欧州共同体（EC）は「環境にやさしい輸送手段」として重視する一方、ライン川の支流のライン川とドナウ川を運河で結ぶ「マイン・ドナウ運河」が開通したことに象徴されるような、内陸水運の新設や増深・拡幅などが進められているといふ。（一九九六年五月三十日 朝日）

東京伝説、東京は、江戸の昔から「水都」だった。運河や掘割が縦横に走り、米や塩、木材、薪炭など全国からの物資が舟で上がった。かつては物流の大動脈、江戸期に完成の「水都」。埋め立てが進み情勢薄れる。（一九九七年一月二十七日 読売）

江東区直営・水上バス、時代の荒波高く新年度廃止検討。江東区の上バス船長、小泉二治夫さんの元に、横浜市内のドックで冬場の検査を終えた愛船「かわなみ」が戻ってきた。水上バスの船長になる以前、材木をいかだにして下町の運河を往復する「引き船」の船長を二十三年間も続けた。浅瀬の位置や波の高さを知り尽くしている小泉さんの経験は、安全運転を求められる水上バスに必要不可欠。（一九九七年一月二十五日 読売）

隅田川最後の渡し船で、昭和の初めまで運航されていた「竹屋の渡し」が三日、再現された。台東区制五十年を記念した催しのひとつで、同区や、職員らでつくる「東京・下町ライプ計画実行委員会」が企画した。（一九九七年五月四日 朝日）

テーマ2 消えゆく水都と伝統



江東区の水上市バス。全国初の自治体直営水上バスとして1985(昭和60)年に登場した。新たな下町の足として当初脚光を浴びたが、92(平成4)年度の年間乗降客33,000人をピークに利用者が減り続けた。98(平成10)年11月をもって事業は打ち切られたが、民間企業に引き継がれ近く再出発の予定。(写真提供:江東区)

マンハッタンを含む島々と半島から成る巨大都市ニューヨークで近年、通勤など市民の足としてフェリー交通網が急成長、水の都「ベネチア化」が進んでいる。渋滞にあえぐ陸を嫌い、川面を揺られ往来する人々の数はますます増えそうだ。
(一九九七年五月二十日 読売)

震災に備え「舟運」整備 江戸、明治時代に栄えた「舟運」を復活させよう。建設省は本年度から荒川、江戸川、淀川の三河川で航路の整備に乗り出すことになった。
(一九九七年十月六日 読売)

河川舟運を都心で活用 物流効率化へ建設省 建設省は都心の物流効率化を進めよう。河川舟運を活用

する基盤整備に乗り出す。
(一九九八年一月三日 日経)

伊勢神宮の「ご神木」などを宮川を下って伊勢まで運んだ筏(いかだ)師が、三重県宮川村で半世紀ぶりに復活した。消え行く技を記録に残そうと、村が地元最後の筏師 熊野金三さんに依頼した。
(一九九八年三月二十日 朝日)

新たに標識を設置 建設省は二十八日、河川での船舶通航の基本ルールを新たに策定する方針を固めた。建設省は、道路渋滞の緩和や災害時の物資輸送で河川舟運が有効と判断し、そのためには全国の河川で統一されたルールが不可欠と判断した。
(一九九八年三月二十九日 読売)

川崎市の幸区幸町の多摩川河川敷に整備してきた水上バス発着場が完成した。災害時の緊急物資荷揚げ施設も兼ねる発着場からは臨海副都心を巡る水上バスが運行新しい観光コースとして期待される。
(一九九八年五月二十五日 読売)

陸上交通の発達に伴い衰退した河川舟運の復活を提言する報告書を、建設省河川局長の私的諮問機関「河川舟運に関する検討委員会」がまとめた。今年度から、荒川、江戸川、淀川で船着き場整備や川底の掘削などに着手する。しかし、河川管理者が条件整備を進めても、問題はどれだけ需要を喚起できるかだ。
(一九九八年六月二日 読売)

川崎市の多摩川河口と東京・お台場を結ぶ、同市の観光水上バスが初出航した。水上バスは、建設省が同市と進めた治水事業の「スーパー堤防」に合わせて建設した、多目的棧橋を利用したものだ。
(一九九八年七月二日 読売)

江東区は十日、区営の水上バス事業を九九年四月に客船運航を手掛ける民間企業の海洋商船へ譲渡すると発表した。休止を決定していたが、同社から事業譲渡の申し出があったため事業を継承する。
(一九九八年九月十一日 日経)

東京都内の荒川流域で、全国初となる河川通航標識の設置作業が進められている。
(一九九八年十一月五日 読売)

水の都・新潟に舟運を復活させようと、地元有志が市民から出資を募り船会社を設立した。その名も「信濃川ウォーターシャトル」。河口から中流部まで水上バスを十五、二十分間隔で走らせ、日常生活の足にする。
(一九九八年十一月十八日 日経)

よみがえる下町の舟運 荒川と隅田川、東京の下町を南北に貫く二つの川が、その間を流れる内部河川を通じて結ばれる事になった。建設省が、約二十年前に撤去された荒川と内部河川をつなぐ水位調節のための「閘門」を復活させるもので、年度内にも着工、五年後の完成を目指す。
(一九九九年三月二十五日 読売)

荒川使い物流効率化 河川での舟の運航を活用して都心部の物流を効率化する試みが進んでいる。建設省を中心に学識経験者や民間事業者、自治体関係者らが荒川下流部の舟運を検討する委員会を発足させ、十日に土砂を運搬する実験をした。
(一九九九年三月十一日 日経)

川を行き来する船にも交通標識をと、建設省が全国に先駆けて荒川に試験的に設置した「河川通航標識」が好評だ。同川を運航する船会社からは、「川の状況が分かって便利」、付近の住民からは、「川の風景としても楽しい」といった声が上がっている。
(一九九九年四月十四日 読売)

【水都の伝統と智恵】

水郷の町・千葉県佐倉市の市立水生植物園で八日、花嫁が小舟に乗って嫁ぎ先に向かう「嫁入り舟」の風習が再現された。嫁入り舟は、昭和四十年ごろまで水郷地区でよく見かけられた結婚風景。周囲で開催中の「あやめ祭り」に合わせ、記念行事として実現した。
(一九九六年六月九日 読売)

「大垣は水の都でしょ。川が多く、かつて自噴水という井戸水がどこでもわき出ていた。昔はその水を井戸槽(ぶね)にため、夏には野菜や果物の他、まんじゅうまで冷やして売っていた。それを二十年前に復活させたんです」そう教えてくれたのは「金蝶園総本家」の女将(おかみ)、北野和子さん。アン玉を、クズ、ワラビ粉を練って、たいたもので包んであり、つるつとした口当たり。このまんじゅうを売る店が増え、夏の風物詩になっている。
(一九九六年八月八日 読売)

水郷の街から。葛飾・水元地区。軒下の小舟、水害の記憶、消え行く「水塚」。葛飾地区東水元。ここで農業を営む大須賀達雄さんの敷地には、「水塚(みづか)」と呼ばれる水害避難用の小屋が、今も残っている。かつて水田地帯だった水元は、水害地帯でもあった。かつて利根川流域に残る水塚を調査した埼玉県岩槻市立慈恩寺小の小林文男教諭が語る。「治水行政だけに任せるのではなく、水塚のような、伝統と歴史がある先人の知恵を水害対策にどう生かしていくかが、これからの課題ではないか」
(一九九七年十月十日 読売)

大雨の時は水面下。「沈下橋」をこぞ存知だろうか。昭和初期の財政難下で考え出され、以来、高知県内を中心に造られてきた簡易なコンクリート橋だ。土手から土手ではなく水際から水際の最短を結び、橋脚も低く、大水の際には水面下に沈むことからその名がついた。日本最後の清流、

四万十川には、本支流合わせて約五十もの沈下橋が残っているが、欄干もない一車線の橋だけに、次々と架け替えられ、数を減らしてきた。その四万十川の沈下橋が、公共工事の発想の転換とともに全面保存されることになりそうだ。
(一九九七年十月十六日 読売)



四万十川にかかる沈下橋(高知)